series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第四十章

Old Friends

峯村　明

リ・コンストラクション

登場人物
40・ Old Friends
369.
370.
371.
372.
373.
374.
375.
376.
あとがき
奥付

登場人物

桧山 健	Ｈ＆Ｌ財団・財務部門勤務
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
レル・ヴァリス	Ｈ＆Ｌ財団・医療チームの医師
ヘルガ	〃
アマセオ	世界の果ての島出身の男
シパド	冥界王の協力者
ベネトナシュ	ミクトランの妖怪・自称『死神』

40・Old Friends

この物語は隅々までフィクションです！

369.

　健はベネトナシュを締め上げている。
「すると――イリチヤを要求したのは――」

「――テクトリが口を滑らしたんだ。冥界王にはこどもがいるって」

「――――」

「まあ、敵将を捕まえたら、一族根絶が一般原則――」

　ばきっ、と気持ちの悪い音と共に、ベネトナシュはテラスの上を五メートルは吹っ飛んだ。
　彼の仮面の、今度は右半分が歪んだ。健は左手で殴って歪みを均一にするのを忘れなかった。スクナが見かねて二人の間に立ち、ベネトナシュに声をかける。
「あんた、もう黙っていなされ」

「き、訊かれたから答えただけなのに！」

「なんでわざわざ彼の神経を逆撫でするようなことを言うかね」

「彼は」、とシパドは目の動きで健を指してユミコに尋ねた。「なにを怒ってるのだ？」

「……お訊きしていいかしら、冥界王さまに息子がいること、あなたはご存知？」

　明らかに、シパドは知らなかった。
　怒りに燃えた健がさらにベネトナシュを締め上げているのを横目で見て、エドミールがシパドとユミコに加わった。

「冥界王にはイリチヤという名の息子がいる。彼らは互いの存在を知らずに出会ってしまい、父親の方が息子に手を差し延べた。まあ、身に覚えがあったというわけだ」
「シパド、貴女が私に命じた金貨鋳造を覚えているか。あの金貨に刻まれたのがイリチヤだ」

「冥界王様の、実子――？」

「当初、金貨にはアンベレオ王の肖像が刻まれるはずだった。それが急きょの変更。そんなことができるのは国王より力のある者、冥界の王しかいまい」

　それは父親の息子に対する認知と謝罪だった。だが。息子にとっては苦悩と、重圧と、嫌悪でしかなかった。イリチヤの苦悩を間近に見、その表情を嫌というほど描きとめたバイスロイである。

「イリチヤは到底受け入れられず、ついにふたりは決裂した」

370.

「それから長い時間を経て、この世界で、イリチヤがベネトナシュにさらわれそうになるという事件がおきた。未遂に終わったが、ベネトナシュの背後にテクトリ、さらに冥界王がいるものと考えるのが自然だろう。
しかし、イリチヤは不審に思った。
最後に決裂した時に、冥界王は相当ダメージを受けたと感じていたからだ。イリチヤはそれを、自分の胸の痛みとして受け止めていたんだ。彼はそういう……感受性の強い子だった。
　これは私の想像だが……イリチヤは、もしも、それほど激しい拒絶を受けたのが自分だったら、と考えた。自分のアイデンティティが揺らぐ衝撃だっただろう、自分の過去を振り返らずにいられないだろう、と。ならば、今の冥界王は過去の彼とは別人になっているかもしれない、と。

ところが、冥界王を親玉に持つベネトナシュがさらいに来た。それも、あそこで怒り狂ってる桧山健の五歳の息子を人質にとるという卑劣な手を使って。健があの妖怪を親の仇のように扱うのはそういうことだ。じっさい、親の仇でもあるし。

イリチヤは冥界王の実情を確かめずにいられなくなり、自らポータルをくぐって冥界へ入ってしまった」

「待て――」

「しかし、イリチヤをさらってくるよう指示したのは冥界王ではなくエンリルで、その目的はおそらく——今、健が怒っているのはここだ」

「ちょっと待て！　ポータルをくぐって冥界へ入ってしまった？？　本気か！？」

　シパドの叫びに皆が振り返った。

「なにか——まずいことでも——」
　エドミールは、ポータルに入るイリチヤを見送った後の桧山健が茫然自失していたのを思い出す。健は一緒に行くべきか否かで迷いに迷った。戻って来られるのか、まったく未知数だったから、まずくないわけがないが、シパドの反応はもっと、不吉なものを予感させた。

「あの『ルカティマのポータル』は閉鎖される」
「何十年か前にルカティマから運び出されて行方知れずになっていたものだ。大都会の真ん中でさらし物になっていたのをようやく見つけた。小さなものだがベネトナシュ程度のエネルギーでも出入りができる危険なものに変わりはない——」

「閉鎖したら——どうなるんだ」
　我ながら愚かしいと思いつつ、エドミールはそう問わずにいられない。

「もちろん、何物も通過できなくなる」

　そしてシパドは、片手で口元を覆うという彼女らしからぬ格好で、視線を落とし、考え込んだ。

　いっしゅん、健が妖怪を締め上げる粗雑な騒音も途切れ、あたりはしん、と静まり返る。BGMのようにピアノ演奏が流れている。葬儀会場からの中継で、曲はサン・サーンスの『白鳥』から別のものに替わっている。ゆったりした長調の、胸を締め付けられるような旋律のこの曲は、葬儀の終了の意味があった。

　ふとあたりを見回してユミコは気がついた。ヘルガの姿がない。それに……ひろもいない？　そして……レル・ヴァリスが携帯電話でだれかと話している——

　レル・ヴァリスは通話中のまま、「ケン――」、と呼んだ。レルが、こっちへ来てくれ、と手振りするのを見て、健はベネトナシュを締め上げる手をしぶしぶ放した。
健が近づくのを待って、レルはエドミールにアイコンタクトし、健とエドミール両方に言った。「今しがた、マミヤが葬儀会場へ向かった。ヘルガがいっしょだ」
「ひろが？　どうして？」健はきょとんとした。

「シンの様子が、ちょっとおかしい」

*

　真は葬儀が始まるころから眠気を訴えていたらしい。ピアノに触れる前に眠り込んでしまい、いまだ目を覚まさないのだとレルは説明した。

「それで、真が弾くはずの演奏を、急きょ録音データで流したんだそうだ」
「ああ、そういう手は講じてあった。どんなトラブルに見舞われるかわからないからな」
「真は"マルガリータおばあさま"にさよならするためのピアノ演奏の意味をよくわかっていた。それを……眠ってしまうとは」
　亡くなったマルガリータ妃は真とは血の繋がりはないが大祖母にあたる。

「本人の意志に関係なく、緊張する場面で眠り込んでしまう症状がある。ナルコレプシーというんだが、それかもしれない、とヘルガは言っている。
うちの医療コンテナに移してマミヤが付き添ってるから、とりあえず、心配しないで。
マミヤは今までこんなことはなかったって言ってるそうだけど、ケン、きみは心当たりある？　それと、きみのご先祖にこういう症状持ってた人はいない？」

　ナルコレプシーなる症状は発症は十代中頃がもっとも多く、それ以外はまれなのだとレルは言う。真はまだ五歳だから、当てはまらないかもしれない、とも彼はつけ加えた。

「心当たり――？」
　まだ学生だったころ、アデレードで先祖の記録は読み漁った。祖父にしろ、曽祖父にしろ几帳面な人たちで、日常の出来事は色々書き残されている。やれ風邪をひいただの、腰が痛いだの。けれどもなにかしら持病を抱えていたという箇所はどこにもなかった。父の光一は二十代で事故で

早逝、健自身、持病というほどのものは持っていない。真の祖母にあたるソフィアもそういった症状を持たなかったことはエドミールの様子から察せられた。

が――ふとなにか思い出しかけたが、記憶はあいまいで、手をすり抜けてしまった。

「医療コンテナにいるんだな――」
「落ち着いて。ケン。ヘルガは脳神経内科の専門家だから任せといて大丈夫だから。心配なのはわかるけど、こっちも放っておけない。わかるだろ？」

　と、その時――

372.

　ふっと空が翳った。なにかが真昼の太陽を遮ったのだ。思わず空に目をやれば――

　巨大な鳥のシルエット。

　イリチヤ？

　誰もが一瞬、そう思った。が――違う。太陽を背に空を舞うシルエットは翼竜のものではない。神秘の緑色のオーラをまとう、明らかに鳥だ。それが、すいっと滑るように急降下してきてテラスに降り立った時には人の姿をとっていた。

　レルは呆然とつぶやいた。「――アマセオ？」

　その名に反応するように、"鳥人間"は振り向いた。三十代半ばくらいに見える精悍な男は強い眼差しをレルに向けた。「レル・ヴァリスどの？」

「やはりアマセオ！！」
「レル・ヴァリス！　なんと！　そなたか！」
　花が開いたような開けっぴろげの笑顔。こいつこんなキャラクターだったっけとレルがとまどうほどの眩しさだ。そして彼に神々しいほどの鳥の特性を与えているのは弟のカガセオ。彼らは一心同体である。

「積もる話は多々あるが、私は急いでこいつに会いにきた。すまんな」
　アマセオが"こいつ"と指さしたのはシパドだった。シパドに向かった時、輝くばかりの笑顔は引っ込んでいた。

「手間取ってるようだから応援にきたぞ。"やつ"はどうした？」
　シパドは無言で顔の向きを変えて応じた。その先には――スクナに踏みつけられたベネトナシュ。「え。スクナさま」スクナは「よう」と手をあげてアマセオに挨拶した。

373.

　急いでいるアマセオにはわるいけれども、あまりに久々の登場なので、少々振り返らせていただく。

*

　アマセオとカガセオは『Salamander in the circle』超古代日本編（第11章「天津甕星」から15章「ふたつの北極星」まで）の主人公たちである。

『世界の果ての島』の王に織物の分野で仕えたシトリ族の本家筋の人間で、三つ子として生まれた。当時、三つ子は王族にしか生まれない特殊なものとして知られ、臣下に誕生してしまった彼らはその存在自体、王家に弓引く者だった。

一族に災いをもたらされることを怖れたシトリ族長の命で、彼らはアマセオひとりを残して処分されるが、弟カガセオは魂体となりながら兄と共に生き、妹チドリは生き延びて兄妹とは知らずにアマセオの妻となった。

アマセオはシトリ族の継承者だったにもかかわらず、家業に馴染めず、一族を守護するキジを射殺(いころ)してしまい、ついに勘当される。王家の兵となった彼はホシナ族の警護を任され、そこでミツハ＝メルノと出会い、ホシナ族と行動を共にすることになった。

実家に残したチドリに生まれたのがまたもや三つ子だったことで、アマセオの立場にもシトリ族の立場にもさらに暗雲が立ち込める。アマセオがただ者ではないことの証しでもあった。

この危機を治めたのがカガセオの強大な力、彼は三人の赤子を一人の人間として統合したのだった。

余談だが、シトリ族は鳥＝酉、アマセオとチドリの子孫は後世まで『お酉さま』として人々に親しまれた。

やがてホシナ族は王家の後継者争いに巻き込まれ、かばいきれなくなった王によって国外へと脱出、この時、王の指示でスクナが同行、一方のアマセオはシトリ族内部の者から王家への謀反を密告され、王家の主戦力と戦ってこれを破り、ホシナ族のあとを追って国外へと出たのだった。

ホシナ族は現在のハワイ島に到着して休養、スクナは地下潜航中のエウメロス人と出会うことになるが、それは彼の妹コタエが『世界の果ての島』を訪れていたレル・ヴァリスと共にエウメロスへ渡ったからである。そしてエウメロスのヘルガ王女が急きょケストル王国へ飛ぶ際に、王女と、同行を申し出たスクナとばったりと遭遇したアマセオだった。

結局、ヘルガ王女はスクナとアマセオをお供にケストル王国を訪問し、現地を探索中のバイスロイを探し求めることになったのだった。（第18章「王女の冒険」・19章「ミクトランへの道」）

以上がアマセオこと天津甕星の背景、おおよそのあらましである。

その後、スクナ、ヘルガ王女、バイスロイの三名はケストル北方の氷河決壊に巻き込まれ、アマセオは彼らを救い出すこと叶わず単身、レル・ヴァリス、コタエらが待つエウメロスの地下シェルターへと跳ぶ。いや、スクナとコタエの力で否応なく移動させられた。

あの時のことを思い起こすと、今でも背筋が凍る、アマセオはそう思う。
地下シェルターで彼を出迎えたのはヘルガ王女の警護責任者であるレル・ヴァリス、また、王女の弟カールだった。
王女を見殺し同然に、他国人の自分だけが生きて戻って来たことを、責められ、八つ裂きにされる覚悟さえした。だがエウメロス人たちの反応は全く違っていた。レル・ヴァリスとはその時からのつきあいである。

あの時分の主だったメンバーがほぼ顔を揃えているのを見て、アマセオは驚いた。その中で異分子のようにシパドが金の光の中にいる。

374.

　ミクトランの妖怪・ベネトナシュを捕えるために来た、アマセオは己の来訪の目的をそう告げた。
「地上に出てきている"やつ"の仲間を全員捕えてミクトランへ連れ戻す、それが我々の計画だ」

「連れ戻して……閉じこめる？」とレル。

「いや」アマセオは頭を振った。「"やつら"の生まれ故郷へ帰ってもらうのさ」

「――というと、アマセオどの」エドミールは珍しく口ごもりながら尋ねる。

「アマセオでいいですよ」
「アマセオ、よもや、彼らは大熊座へ――」

　アマセオがうなずく。と――スクナに踏みつけられていたベネトナシュが、まさに妖怪のような気味の悪い素早さでにじり寄ってきた。

「ちょっと！　ちょっとちょっと！！　今、なんて――？」
「星へ帰れと言ったのさ」
「――はああ？？　え？　ミクトランへ帰れってのはわからんでもないよ、でも星へ？　どういうこと？？」
「きみらの故郷は大熊座にあるからだよ」
「ワタシの故郷はミクトランだよ」
　ベネトナシュは陰にこもった声でつぶやいた。「大熊座？　知らないよそんなの」

　そういえば、と健は思い出す。ブリュッセルでひと悶着あった時、ベネトナシュは同じようなことを言ってやはり拒絶反応をみせていなかったか。

「おまえはまさか、自分の出身地を知らないというのか？」
「知らないも何も！　ワタシはミクトラン生まれだよ」
　真剣にそう訴えてくる。もしかしたら本当かもしれないと思わせる真剣さである。

「ベネトナシュよ」、とユミコ。「そなたは幼いころテクトリに連れられて地球に来たのです。地球で生まれたのではありません。そなたの起源は大熊座にあります。わたくしは冥界王さまからそう伺っています。それとも冥界王さまのおっしゃったことは偽りだったのでしょうか」

「テクトリは、おまえはミクトラン生まれだと——」

　彼の中で冥界王とテクトリが天秤にかけられていた。テクトリの底意地の悪さと性格の悪さとを、ベネトナシュほどよく知っている者はいまい。

　呆然と見上げてくるベネトナシュを見て、ユミコは彼をかわいそうに思った。彼とテクトリのつきあいは長い。身内の関係にあるようだが、その相手から、幼少時から虚偽を教えられていたとは、二重の信じがたさだろう。
彼のアイデンティティが……そんなものがあればの話……崩れていく悲惨な音が聞こえるようだ。

「ウソだ——ウソを教えられていたなんて——」、彼は震え、かすれた声でつぶやく。「たすけて——奥方さま——」
　すすり泣き、ユミコにすがりつかんばかりだ。

375.

「そなたは多くの罪を犯してきました。それはもう、数え切れないほどです。桧山健やレル・ヴァリスがあなたを打ちのめしたい気持ち、私にはよくわかります。そなたは忘れているかもしれませんが、アマセオさまの一族、アマセオさま当人をも陥れた過去もある。ここにいる多くの者が、そなたを打擲（ちょうちゃく）し、断罪したいと思っている。わたし自身、そなたから受けた仕打ちは忘れられません」

　ベネトナシュがすがりついたたおやかな女神は容赦しなかった。

　ベネトナシュよ、とユミコは穏やかな声で語りかけた。ユミコはもはや自分が何者なのかわからなくなっていた。自分の体験ではない他者の記憶にすぎなかったmitsuhaの、彼女の感情が生々しく浮上してきて、ユミコの人格を圧倒した。mitsuhaがやってきて乗り移ってしまったようだった。

「わたしはずっと不思議に思っていたのですが、何故そなたは他者を傷つけて憚らないのでしょう。実際、そなたはあらぬ噂を流すという方法で、わたしと冥界王さまとの間を裂きましたね。そのときのそなたの気持ちを聴かせてくれませんか」

「――それは――テクトリの命令だったからで――テクトリは、噂を聞いた人らが驚いたり右往左往するのがとてつもなく面白いと言って、ワタシにやらせたからで――」

「そなたはどうだったのですか？　やはり面白かったのですか？」

「――――」

「正直におっしゃい」

「ええ……まあ……」

　かつて――禁じられた方法で巨人族を培養し、無理やり地上へ送りこんだことで転送システムを完全に破壊してしまった。あれもまたテクトリとベネトナシュが面白がってやったことだったなと、健は誰にともなく低くつぶやいた。

「あの噂で、わたしが傷つくだろうとは、思わなかったのですか？」
　ユミコはあくまで穏やかである。

「そ、そんなつもりはなかったんで！　だって、宮廷の人らはみんな、楽しんでいたし！　わ、悪気はなかったんで！」

「そう？　でもそなたは、わたしを見るたび、わたしを恐れているではありませんか？　なぜ？」

「それは――テクトリに言われてたんだ、仕返しされるかもしれないって――」

「仕返しですって？？」ユミコの目は丸く見開かれ、声が大きくなった。

　健の脳内にぽっかりと浮かんだのは――『中学生か』という言葉。

「わたしにはそなたらに仕返しできるような力は、ございません」

「いやあのしかし」

「ある、というなら、それはそなたら自身の恐怖が生んだ幻です。そう、幻にすぎません。
ベネトナシュよ、そなたらは地球生まれではないゆえに、地球人にはない能力を持っている。地球人には抵抗することが難しい、驚異的なエネルギーです。けれどもそなたらはそのことがわかっていない。そなたらにそんなつもりがなく、面白半分で行った行為も、地球人には破滅的なダメージを与えるということがわかっていない。ベネトナシュ、知らなかったでは済まされますまい。なぜなら、そなたらは仕返しされることを恐れているのですから。

そして地球人にはないエネルギーを『神的なもの』と人々に見せ、神のようにふるまった。その時のことが歴史に刻まれています。『4 Ahau 8 Kumku』と」

　落ち着いた声が雷のようにベネトナシュを打った。

376.

「地球生まれの人間は、肉体を去って、己の行いがどれほど他者を傷つけたか、己の身をもって追体験し、他者から受けた怒りや恨みを清算して新たな生へ向かう。そのたびリセットして生まれ変わるのです。先ほどシパドさんがそう証言したのを、聴いていませんでしたか？

けれども、そなたは過去からずっとその肉体とメンタリティのまま。それ故に他者は、受けた絶望、怒り、屈辱、憎しみ、自嘲、そういった感情を呼び覚ましてしまうのです。他者を縛りつけているといっていいかもしれません。

清算をしてリセットしてこなかったということは、そなたが地球人ではない証拠」

「そんな！　だって！　ワタシは！」

「ええ、できることとできないことがありましょう。そなたにできるのは、生まれ故郷に帰り、そなたの種族の基準で、裁定を受けることです」

40・「Old Friends]

41・「」へ続く

あとがき

ちょっと間が空いてしまいました。ペースが乱れ気味。
実は、ちょいと浮気してたのです。三年前に書いて放置してあった二次創作を某Pixivに投稿…三年前？　なにやってたんだろうとひっくり返してみたら…『Salamander in 〜』まさに超古代日本編の佳境で、この二次創作やってたせいで第十四章と十五章の間が二か月も開いてたりなんかしまして。どちらか（鳥）がどちらか（鳥）を呼んだって感じ。へー、こんなことってあるんだなーと自分で驚き。

思い起こせば、シリーズのなかで一番てこずって時間がかかったのがこの超古代日本編。なにしろ資料がない。古事記には全然出て来ない、日本書記にアマセオの名前があって、なぜかスワのタケミナカタとごっちゃになってる。わずかな手がかりは彼の家系図くらいで、これとにらめっこして…それにしてもアマセオがなぜ『天津甕星』と呼ばれて、なぜ身内から討たれたのか（討ったタケハヅチはアマセオの孫）、なのに一族は断絶することなくかなり後世まで継続……。わからないことだらけ。
そこで考えたのが、当時（アマテルキミの次代、次次代の世）の最高存在を脅かす力を、不本意に持ってしまった人物の物語。

アマセオには『Salamander in 〜』の終盤で沸騰する黄金の中で壮絶な目に遭ってもらいましたが、現代編のどこかでもう一度登場してもらいたくて機会をうかがっておりました。現代編もたぶん、終盤です。

2026年1月13日　記

奥付

リ・コンストラクション　第四十章　Old Friends

2026年1月15日初版発行

著者　峯村　明　E-mail

表紙素材　freepik

制作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社